

## マスターズを彩るレジェンドたち(29)

暦の上では6月。この月は別名・水無月とも。「水が無い」の漢字が並ぶが、10日はうっとうしい入梅だ。この日は時の記念日でもある。21日は一年で昼間が最も長い日の夏至。2日後はオリンピックデーだ。いよいよ真夏の季節がそこまで。マスターズの皆さん、9月に京都開催となる全日本マスターズ選手権に備えてトレーニングを。今月もマスターズのレジェンドの続編をお届けしたい。

### 小西亘さん(56歳・栃木) お見事、1500mで世界新樹立

栃木県の会社員、小西亘さんが2023年5月に同県内で行われた東日本実業団選手権の男子1500mで、4分11秒79のマスターズM55クラス世界記録の力走をした。

小西さんは当時、55歳。「レース当日が走りやすい状態だったのかどうか、はっきりとは覚えていません。私自身、世界記録を破るようなタイムを出せるなんて思ってもみなかった」と。4分11秒79のタイムは、キース・ベイトマン(オーストラリア)が11年につくった4分12秒35を上回るものだ。

では、同クラスの日本記録はといえば、小西さんが22年に55歳で出した4分16秒63だ。わずか1年で自己記録を5秒近く縮めてしまった。すごいバイタリティーである。

小西さんはマスターズ連合がまとも

た23年3月31日現在の記録集によると、800mではM45・2分00秒15が13年で45歳のとき。1500mではM45・4分00秒19を46歳で。さらに同クラスの10000mで30分59秒03を、こちらも46歳でマーク。

次にM55クラスになると、22、23年にかけて800mから、1500m、3000m、10000mと間口が広がる。1500mを除いて800mは2分05秒66、3000mが9分18秒53、10000mは33分28秒74と、どの種目も55歳で出した。以上が記録集によるクラス別日本記録に記載されている小西さんが樹立したタイムだ。

人生の円熟期で各中・長距離の記録を書き替えている小西さんは、栃木っ子だ。小学5年生の頃に陸上をはじめ、学校ぐるみで町内大会などに出場していた。中学・高校でも陸上の長い距離に励んでいたが、「高校のときはインターハイなど無縁でした。本当はサッカーをしたかったのですが」と語る。

高校時代の記録を尋ねると「1500mは4分08秒、5000mで15分50秒ほどでしたか」とのこと。高校卒業後は地元の宇都宮大へ進み、陸上を続けた。トラックでは関東インカレの2部に出場している。大学卒業後も青森・東京間都県対抗駅伝の栃木代表、全日本実業団駅伝の出場を目指して精進した。全日本行きの切符は取れなかったが、東日本実業団駅伝には何度か出場。青森東京駅伝は30歳頃に2年連続2回、出場を果たしている。また、個人種目では関東選手権の1500mで2回ほど

入賞するなど、精力的に競技と向き合ってきた。

マスターズとの出会いは37歳のとき。「幅広い年齢の人が参加するマスターズという陸上がある」と教えられ「マスターズ陸上? そのような陸上の組織があるのか。面白そうだな。よし、マスターズへ入ろうか」と入会を決意した。

小西さんがマスターズへ入った頃は、トラックではないが都道府県対抗全日本マスターズ駅伝で、栃木チームは健闘、上位へ食い込む強豪だった。06年の第19回大会の男子の部で2位となったこともある。

小西さん個人としては先に述べたように、タイムは常に上位にあるのだが、勤務の都合から遠方で行われる全日本マスターズ選手権にはほとんど出ていない。記憶に残っているのは14年、岩手・北上で第18回アジア・マスターズ選手権を兼ねた第35回全日本マスターズ選手権だ。

「北上での大会に出たのが初めてだったかな」という北上大会での成績は? M45クラスの800mで2分03秒86、1500mが4分07秒20、5000mは15分27秒30、10000mではただ1人、32分台の32分23秒68と、いずれも独走で4種目に快勝。46歳での快挙だった。

全日本とアジアの両タイトルを手にした北上大会後、19年の群馬での第40回記念大会で、出場3種目にまとも快事。M50クラスとなり800m 2分07秒30の大会新、1500m 4分17秒85と日本新、大会新、5000m16分



M55・1500mの世界記録を12年ぶりに塗り替えた小西さん。6月末には新潟で開催される日本選手権のマスターズの部に出場予定。写真提供/小西亘さん



兵庫投擲倶楽部の練習会で共に汗を流す会員と。前列中央が莉部さん。写真提供／兵庫投擲倶楽部

20秒96の各Vを遂げたのだ。

学生時代とは違い、マスターズで“熟年の星”となった小西さん。毎朝4時起床、1時間ほどの早朝練習を励行し、毎食の栄養にも気を配っている。6月の第108回日本選手権のマスターズの部にも出場予定だ。

### 莉部裕子さん(85歳・兵庫) ハンマー投に魅せられて

2023年の秋、山口県の維新百年記念公園競技場で開かれた全日本マスターズ選手権の第44回大会の女子ハンマー投で、W85クラスの莉部裕子さんが18m60の日本新記録をマークした。

「競技場の状態とか、天気がどうか、全く覚えていません」と話す莉部さん。兵庫県神戸市に住み、ハンマー投に取り組んでいる。重さ2.0kgのハンマーに魅せられたのは「60代だったか、テレビなどで室伏広治さんの投げる姿に憧れて「私もやってみようと思った」のがきっかけだ。

昨秋、莉部さんが空中へ投げた18m60は、旧日本記録の14m44を9年ぶりに更新したもの。莉部さんの記録樹立は昨年だけではない。M70クラスのときはハンマーではなく、やり投で23m60(重さ0.5kg)を70歳で。さらにやりは14年に21m01(同0.4kg)とW75の日本記録をつくった。

ハンマー投は14年、75歳で29m31(重さ2.0kg)のW75クラスの日本記

録をつくり、次に19年の80歳で26m48を投げた。現在、W75、80、85と3クラスの日本記録ホルダーとなっている。

マスターズへ入ったのは1998年、兵庫県内にお目見えした淡路島と神戸市を結ぶ明石大橋を祝い、マスターズの世界ロードが大橋を利用して行われた年。それまで莉部さんはマラソンなど、長い距離に興味を持って走っていた。

マラソンは国内だけでなく、ホノルル・マラソンやゴールドコースト・マラソンなどに参加している。「タイムはたいしたことはありません。4時間台どまり」と話す。

ロード走を機にマスターズへ入会して以後、投てきにスイッチして記録を伸ばしてきた。マスターズの全日本大会には「あまり参加していません」とのことだが、印象に残っているのは“おらが里”の新潟であった大会だ。

2016年に第37回大会として行われた越後でのイベントでは「全然ダメでした」と言うが、ちゃんと3種目で入賞を果たしている。畑違いの走幅跳は2m66の4位だったが、ハンマー投は24m37で2位につけ、やり投では20m56を飛ばし見事に優勝だ。いずれもW75クラスで、ちょうど喜寿の77歳。やり投とハンマー投で表彰台上がり“故郷に錦”を飾った。

よほど肩が強いのか、ハンマー投だけでなく、やり投でも新潟大会の2年

前、2014年に第35回全日本と第18回アジア両大会が岩手・北上市であった折、W75クラスで21m01を投げ1位になっている。この大会ではハンマー投でも27m11で1位と、2種目でアジアのNo.1になった。

この年は北上大会の後、石川県で行われた全日本マスターズ重量五種競技選手権においても、W75クラスを2824点(23m42、6m89、15m95、18m65、一)で制している。76歳だった。

マスターズ陸上連合の40周年を祝って群馬で行われた19年の記念国際・全日本マスターズ選手権では、W80・ハンマー投で20m61を投げて1位になっており、この後が昨秋の山口大会だった。群馬大会の前は2017年の国際・第38回和歌山大会に出ているが、ここはW75クラスのハンマー投で23m57の2位だった。年齢は不利な79歳だった。

普段は足・腰を鍛えるためと、山登りを日課とし、「毎日登山」で5000回達成の表彰を受けている。本格的な練習は週1回。各週の水曜日に投てき仲間のマイカーで練習場へ出掛け、ハンマーを振っている。

今年は9月に京都が舞台となる第45回全日本マスターズ選手権と、10月の第43回兵庫マスターズ選手権に的を絞り、出場する予定だ。「これからも頑張ります。できれば両大会で記録が出せれば」と控えめだが、はっきりと。